

—歴代編集主幹による— 「幼児の教育」にかけた思い (2)

倉橋惣二氏の遺産を継いで

本田和子



『幼児の教育』誌と倉橋惣三の不可分の結び付きは、改めて云々するまでもなく、周知のことながらでしょう。時には、本名・筆名・匿名などと、書き手の名前まで自在に操作しながら、一誌まるごと自身の文章で埋めてしまつたという有名な逸話や、あるいは、保育事情視察のために、広く欧米を飛び回るという慌ただしい日程の中でも、編集部宛の折々の寄稿は怠らなかつたという本誌への愛情など、倉橋なくして本誌の歩みを跡付けることは不可能とすら言えそうです。

そしてまた、「倉橋なくして本誌があり得なかつた」と同時に、倉橋に関してもまた、「本誌なくして、倉橋も倉橋たり得なかつた」と言えるかもしれません。何しろ、倉橋の保育に寄せる思いのすべてが、この誌上で言葉を与えられ、読み手に届けられるメッセージとして現象し続けたのですし、その結果、全国に彼の信奉者が増え続けたことは

紛れもない事実でした。そして、全国の信奉者たちは、しばしば「倉橋教信者」などと揶揄^{やゆ}されたりするほどの熱心な読者群を形成し、本誌と、また倉橋の思想と実践を、支え続けたのでした。

たとえ、創設者が東基吉であつたにしても、この雑誌を一〇〇年を越える日本最古の教育月刊誌として存続させ、また、長く保育界をリードする指導的地位に立たせ続けたのは、ひとえに、編集主幹としての倉橋の力でした。彼の主幹在任は一九一一年からおよそ四〇年の長きにわたつてゐるのですが、その間、彼は、本誌の編集と無数の読者との応答を通して、単なる研究者でも編集者でもない「唯一無二の倉橋惣三」へと脱皮転生を繰り返し、ついには「かけがえのない日本のフレーベル」へと成長を遂げていつたものと思われます。この雑誌は、彼にとって、単なる所信表明の道具でも新しい知見や情報を発信するツールでもなく、自身の成長を見届ける鏡でもあり、また、その成長が全国の保育実践者たちと共有可能であることを確認する媒体でもあつたのではないでしようか。



私は、お茶の水女子大学に在職した二〇数年を、本誌とかかわりを持つて過ごしてきました。ある時は、編集主幹津守真教授の協力者として、また、氏の退官後は編集の責

を担つて……。ところで、改めて振り返るとき、その時期の私は、ただひたすら倉橋の遺産に縋りつつ、月々の雑誌を世に送ることに努力していたのだとの思いに駆られます。「編集会議」と名付けられた小さな集まりの折にも思いを巡らすのは、倉橋の遺された「編集方針」というよりもっと簡単な「覚書」程度のメモ。でも、集められ並べられる予定の記事に思いを巡らしつつそのメモと照合させ、「これでよいのかな」「最近、特に不足している分野があるのではないか」などと見直したりするのが常だつたからです。

倉橋の遺産というのは、要約すれば次のようなものでした。

本誌は、幼稚園・保育所・家庭などで、乳幼児の保育に従事する人々に向けて、その実践を支え、同時に心の養いとなるべきものであること。そのためにも、優れた現場実践に言葉を与えて、これら読者たちの共有可能なものとなすこと。と同時に、広く内外の研究動向にも目を配り、幼児の発達と保育にかかる最新の情報を伝達することに意を用いること。つまり、個々の実践という私的記録を、実践のよきサンプルとして公の記事として掲載する一方で、いわゆる学問研究の世界での最先端とされる情報をも漏れなく収集し、提示する責務も担わねばならないというわけです。

実践の記録とそれに付加された解釈や考察は、単なる個人の記録に止まることなく、学術研究の分野でも十分に機能するものであるべきでしょう。そして、既存の学問分野

を活性化し、固定化した斯界に新たな動きを導き出し得るよう力あるものでなければなりません。そのためにも、関連する諸分野の研究動向や最先端の果実にも目配りするこ^トが肝要であるというのでした。

これらに加えて、倉橋が書き遺したのは、以下のことがらでした。この雑誌には、常に、かぐわしい「文化の香り」が漂つていいべきであり、本誌を手に取り、頁を繰りつつ記事のあれこれに目を配ると、読み手たちは、そこから匂い立つ「文化の香り」に癒され、「心豊かな」ひとときを送ることができねばならないと、最後の一昧の大切さを訴えたのでした。

日本画の泰斗東山魁夷や、著名な人形作家山田徳兵衛などの絵や記事が誌面を彩り、また、泰西の名画の複製が一隅にひつそりと置かれるのなど、いずれもこの「文化を香り立たせる」嘗みだつたことでしょう。何しろ、倉橋自身も、絵画や文学、あるいは歌舞音曲の世界にも明るい趣味人だったようです。



さて、この記事のねらいは、徒に倉橋を顕彰することではなく、倉橋の遺言が私の編集の導きの星であったということです。そして、今にして思うのは、私にできたのは、倉橋が最後に付け加えたこと、すなわち「文化の香り」を忘れないでという部分だった

ようです。私の補助者として事務処理をしてくれたのが、皆川美恵子氏・小沢誉子氏など文系に強い人たちだったということもありましょう。さらに、この期間、思いがけない研究者たちとの深い出会いもあって、「幼児の教育」は、大変、面白くかつ有意義な足跡を残すことができました。そこで、一つ二つ例を挙げて、「私の編集を振り返る」という、与えられた責を果たしたいと思います。

まず、挙げなければならないのは、森洋子氏のブリューゲル研究でしょう。ピーター・ブリューゲルは、一六世紀フランドル地方の民衆風俗や農民生活を描き、農民画家などとも呼ばれた画家の一人です。そのころ、お茶の水女子大で非常勤講師として「美術史」を担当していたのが、このブリューゲル研究者として著名な森洋子氏でした。豊富な図版の紹介とともになされるその講義が、学生たちを魅了しているらしいことを耳にした私は、森氏に次のような依頼をしてみました。「幼児の教育」という月刊誌に掲載したいので、ブリューゲルの『子供の遊戯』を解説して、二、三回分の記事を作つてほしい」と……。専門の美術雑誌でもないこの雑誌に、貴重な原稿を頂けるからと遠慮がちな依頼でした。

引き受けてくれた氏のその後は、「美術史とはこんな学問だったのか」と、分野を異にする私たちの目を見張らせることばかり。「どうしても確かめたいことがあるから、ベルギーに行つてくる」「ドイツの美術館で調べ物をしてくる」などと、アツという間

に海外に飛び立っていく森氏。担当の皆川氏は、原稿がもらえないで何度も慌てなければならなかつたか。その都度、筆の早い私が「穴埋め原稿」に精を出す羽目となりました。しかも、軽く二、三回のつもりが、二年を越える大連載となり、完成後は分厚い單行本として高い評価を受けた次第です。

幾つかの学会賞や「サントリー学芸賞」などの評価の高い文化賞、あるいは、ベルギーの「王冠勲章シユバリエ章」など、数々の栄誉が燐然とその本を飾りました。授章式場で、「この仕事は、『幼児の教育』誌の依頼から始まりました。根気よく、連載に付き合つてくれた同誌の編集部に感謝します」と森氏が挨拶されるとき、私たちは、半ば恐縮し半ば誇らしく、何やら不思議な感慨にとらえられたものです。音楽学者の海老沢敏氏の『むすんでひらいて考』も、同じような経緯で世に出て、同じような栄誉に包まれた本でした。

保育界の実践力の向上を目指した本誌が、ある時期、こうした営みで文化研究に貢献したこと、今、懐かしく想起します。でも、これらの仕事が、「保育の世界にかぐわしい文化の香りを」という倉橋の思いに、果たして、どの程度適うものであつたかと、月刊誌の幕の降りる今、心もとなく、申し訳なく、思い出したりしている昨今ですが、ご協力頂いた皆様に改めて感謝の意を表して筆をおくことにいたしましょう。ありがとうございました。

(お茶の水女子大学名誉教授)